

# 知っていますか？郷土の民話

## 5月5日に 柏餅を作らない多功地区

今から遡ること、約400年前の1597（慶長2）年10月13日、現在の上三川町一帯を長きにわたって支配した宇都宮氏が、跡継ぎを巡るお家騒動、はたまた石高の偽申告の罪により改易となり、その長い歴史に終止符を打ちました。上三川町における宇都宮氏の治世は40年以上に及ぶことから、人々にとって特別な思い出入れがあったようで、宇都宮氏改易にかかわる、様々な言い伝えや風習が伝わっています。有名なものとしては、上三川城の落城の悲劇にかかわる片目のドジョウ（魚）の話や、落城の悲劇が起きた翌日が5月5日だったことから、端午の節句に幟を立てなくなったとの話など、上三川城については、様々な話が伝わっています。一方、上三川城と双壁をなした多功城の周辺ではどうでしょう？

実は、多功城の周辺にも似たような風習が伝わっていました。それは、端午の節句の日である5月5日は、多功城が落ちた日ということから、これを悲しんで「柏餅」を作らず、翌5月6日から作ることを習慣としたというものです。これを読んで「あれっ」と思う人がいるかもしれませんが。前に記したとおり、上三川城は5月4日に同じ宇都宮氏の家臣である真岡城主芳賀高

武によって攻められ、落城したと伝えられていますが、5月5日に、多功城が落城したとの記録は今のところ見つかっていないのです。

常識的に考えれば、戦いで落城したわけではない多功城は、宇都宮氏が改易になった時と同じ10月13日をもって、廃城になったと考えるのが妥当なのでしょうが、5月5日に廃城になったという言い伝えにも注目すべきでしょう。それは、多功城が廃城となった後、家臣のほとんどが、農民として多功の地に残り、脈々と生活を続けていることを考えると、多功城落城の日の記憶や伝承がいつも簡単に無くなってしまおうとは考えられないのです。

いずれにしても、上三川城と多功城の落城についてのお話や習慣が、今日まで脈々と伝わっているという事実は、この二つが上三川の地に刻み続けた歴史の深さを、今に伝えていると言えるといえます。



多功城の周辺でも落城に関わる言い伝えがあります

# 広報川柳

岡島秀宝 選

話好き日の短さを気にしない

石田

稲葉チイ

座布団の丸くへこんだ猫のあと

石田

大島笑太郎

菜園も五風十雨でいい笑顔

上蒲生

菅沼マサ

夕焼けへ明日の除草を進められ

石田

柳田キミ子

怠けてたつけが重たい筆の先

上蒲生

菅原妙子

年金を手にして見れば少なすぎ

石田

柳田政孝

使い方だけを覚えたあぶく銭

上蒲生

柳田智江

青空を一つ気飲みして散歩する

上蒲生

渡辺文子

天国も地獄も知った深い皺

大町

大八木トク